

【5】 出家・成道・入滅年齢に関する伝承系統

[1] 以上、釈尊の出家・成道・入滅年齢について、原始聖典・仏伝経典・インド撰述文献・中国撰述文献のいうところを紹介しつつ若干のコメントを付してきた。これをそれぞれの文献を一つの単位として表にして取りまとめておこう。

パーリ聖典には“Nidānakathā” “Mahāvamsa”なども含めた。また中国撰述文献のうち経の引用については省略した。

[1-1] 原始聖典資料

文献名	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家— 入滅	成道— 入滅	入滅年齢
パーリ聖典	29	6 7	35	50余	45	80
長阿含経	29			50	(50)	80
中阿含経	29					80
雑阿含経	29			50余	50余	
増一阿含経	29	6	35			80 80余
別訳雑阿含	31			過50		
Mahāparinirvāṇasūtra	29			50余		80
法顕・涅槃経	29		36	50余		
失訳・般泥洹経		12		50	(50) 49	80 79
白法祖・泥洹経					49	80 79
四分律		6				
僧祇律		6 7				
根本有部・苾芻		6				
根本有部・苾芻尼		6				
根有有部・出家事	29	6				
根本有部・雑事	29	6		50余		80
根本有部・破僧事	19	6				

[1-2] 仏伝経典

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家－ 入滅	成道－ 入滅	入滅年齢
修行本起経	1 9	6				
中本起経		6				
太子瑞応本起経	1 9	6				
普曜経		6	3 6			
興起行経		6				
仏本行集経		6	3 5			
Mahāvastu	2 9					
十二遊経	2 9		3 5			
仏所行讃		6				
仏本行経		6				
過去現在因果経	1 9	6				
方广大莊嚴経		6				
僧伽羅刹所集経		6				
衆許摩訶帝経	2 9	6				

[1-3] インド撰述文献

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家－ 入滅	成道－ 入滅	入滅年齢
善見律毘婆沙					4 5	
薩婆多毘尼毘婆沙		6				
尊婆須蜜所集論	2 9			5 0		
鞞婆沙論	2 9	6	3 5			
大智度論	2 9	6		5 0		8 0 余
摩訶摩耶経	1 9					
觀仏三昧海経		6				
大乘・般泥洹経		6				
40・36 卷涅槃経		6				
金光明最勝王経						8 0
出曜経	2 9	6				
大莊嚴経		6				

雑宝蔵経		6				
賢愚経		6				
八大霊塔名号経	29	6				80
梵網経	7		30			

[1-4] 中国撰述文献

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家— 入滅	成道— 入滅	入滅年齢
釈迦譜	19	6				79
歴代三宝紀	19		30		49	79
法華玄義		6				82
法琳別伝	19		30			79
大唐西域記	19 29	6	30 35		50	80
釈迦氏譜	19	6				79
釈迦方志	19 29	6	30 35			
仏祖統紀	25	6	30		50	80

[2] 以上さまざまな伝承を紹介し表示したが、それぞれのレベルの資料を分析してみよう。

[2-1] 原始聖典資料に関しては、出家を29歳とし、成道を35歳、入滅を80歳とする伝承が最大公約数的な伝承であるといえることができる。したがって本総合研究では、上記を基準とすればそれでよいのであるが、念のためにそれ以外の伝承について一瞥しておこう。

[2-2] まず不合理な伝承がある。『長阿含経』と『雑阿含経』は出家から入滅までと成道から入滅までの年数を共に50年あるいは50年余とするが、これは出家と成道が同じ年としないかぎり理に合わない。これはすでに【4】の[6-2]において指摘した通り、出家から入滅までの年数が、成道から入滅までの年数と誤解されたことによって生じた誤りであると思われる。

そしてもしこの推測が許されるなら、上記の表では情報量が少ないから、不合理性は見いだされないが、『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の成道から入滅までの50年あるいは49年もおかしい。

また『別訳雑阿含』の出家の31歳も不合理の部類に属する。これによれば出家から入滅までを「過50」とするから、入滅は少なくとも81歳にならないといけないが、そのような伝承は少なくとも原始聖典にはないからである。満年齢と数え年齢とでは最大2歳の差が生じるから、したがって31歳は満29歳の数え年齢という可能性もなくはないが、普通なら30歳となるところであろう。『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の成道から

入滅までの49年に連なるかも知れないが、これは成道からの年数であって、出家からの年数ではないから、厳密にはこれとも関係がないこととなる。

[2-3] 不合理ではないが特異な伝承がある。出家年齢に関する『根本有部律・破僧事』の19歳である。しかし不合理でないのは情報量が少ないからであって、これも苦行年数を6年とするから、成道25歳という伝承が存在しないかぎり成立しない。もちろん『根本有部律』の他の文献にもそういうものは存在しない。また仮にそういうものがあっても、そうすると出家から入滅までは60年余、成道から入滅までは55年とならなければならない。しかし他の『根本有部律』もこういう伝承を持たない。そもそも他の『根本有部律』文献は出家年齢を29歳とするのであるから、おそらく29歳が19歳と誤記されたにすぎないであろう。

『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の入滅79歳も特異である。しかも79歳は沙羅双樹下での入滅に際していわれ、これを遡ること8ヶ月ほど前の竹林村での雨安居の時点では80歳とするのであるから奇妙である。もしこうした矛盾が自覚されたうえでのことであるとすれば、79歳は「満年齢」で、80歳は「数え年齢」という可能性もあるが、これについての議論は後に譲る。

また『失訳・般泥洹経』の苦行12年も特異である。後に増加して、中国撰述文献では大勢を占めることとなった19歳出家説に関係するかもしれない。もしそうなら成道は31歳ないしは数えで30歳となって、成道から入滅までの年数の50年、49年と合致することとなる。しかし後述するように、19歳出家説をとるインド撰述文献も中国撰述文献も苦行については6年とするのであるから、これにしたがったものでないことは明らかである。

[3] 仏伝経典の整理と分析に入る。

[3-1] そもそも仏伝経典には入滅に関する情報がなく、情報量が少ないが故に不合理な点はない。

[3-2] 仏伝経典伝承の特異点は出家年齢を19歳とするものが増えている点である。しかしこれらもすべて苦行年数を6年とするのであるから、もしそうなら計算上成道は25歳にならなければならないが、25歳成道説は原始聖典はもちろん仏伝経典にも見いだされないから、不合理な数字といわなければならないであろう。

『普曜経』は成道年齢を36歳とするが、これは「数え年齢」と「満年齢」の相違であるかもしれない。

[4] インド撰述文献の整理と分析に入る。

[4-1] これも情報量が少ないから、不合理なものはない。合理的なものは29歳出家、6年苦行、出家から入滅までを50年とし、入滅を80歳余とする『大智度論』と、29歳出家、6年苦行、35歳成道をいう『鞞婆沙論』である。

[4-2] 特異な伝承は7歳出家、30歳成道とする『梵網経』であるが、これによれば苦行は23年となり、むしろ不合理というべきである。

19歳出家をとるものはわずかに『摩訶摩耶経』のみであるが、前述のように25歳成道、出家から成道まで61年、成道から入滅まで55年という伝承がないかぎり、成立しない。

[5] 中国撰述文献を検討する。

[5-1] 不合理な伝承は『大唐西域記』と『釈迦方志』の1説である19歳出家と30歳成道の伝承である。しかし両者とも苦行を6年とするから、計算上は成道は25歳にならないからこの伝承は成立しない。

また6年苦行を前提とすると、計算上は出家29歳、成道35歳が合理的であるが、もしこれをとるとすれば、『大唐西域記』の成道から入滅までの年数50年は矛盾を来す。単純な計算では入滅は85歳にならないから、入滅は一般的伝承にしたがって80歳とするからである。したがってもし50年を尊重するなら、成道は30歳でなければならないわけであるが、成道30歳はどの出家年齢をとっても成立しない。

[5-2] 中国文献ではむしろ出家年齢を19歳とするものの方が多数派であるが、いずれの伝承も苦行を6年とするのであるから、成道は25歳とならなければならないが、そういうものはない。したがって19歳出家説は合理的に説明できない。

原始聖典の19歳説としては『根本有部律・破僧事』があるのみである。もしこれが誤写でないとしても、これは義浄によって唐の久視元(700)年から景雲2(711)年に訳されたものであって、すでに『釈迦譜』『大唐西域記』『釈迦氏譜』などは著された後である。したがってこれが誤写でなく意図的になされたものだとすれば、むしろすでに成立していた19歳出家伝承に影響されたものと考えざるを得ない。

もしそうだとすると、むしろ問題は原始聖典に根拠のない19歳出家説がなぜ中国において定着してしまったのかということである。仏伝経典にすでに19歳説が現れるから(ただし他のインド撰述の文献には19歳説はごく少数しか見られない)、それに基づいたといえればそれまでであるが、それでは中国に翻訳された仏伝経典がなぜ19歳説を採用しなければならなかったかということが問題となる。

その拠り所となったと想像される伝承が『失訳・般泥洹経』である。これは失訳であるがゆえに翻訳年代が不明であるが、宇井伯寿博士は支謙の翻訳と推定され、中村元博士はたといそれが崩れたとしても、漢訳相当経の中ではもっとも古いとされている⁽¹⁾。これは成道から入滅までを50年あるいは49年とするから、成道年齢は30歳というイメージを持っていたことが想像される。そしてさらにこれは苦行を12年とするから、これを足掛け12年とすると、出家は19歳ということになる。したがって漢訳仏伝経典のあるものがこれにしたがって出家を19歳とし、それが中国において定着したということが考えられる。

しかしこれは苦行12年が前提とならなければならないが、仏伝経典にも中国撰述の文献にも苦行を12年とするものはなく、すべて6年とする。これでは成道25歳伝承がなければならないがそういうものもない。またたといそういうものがあつたとしても、それなら成道から入滅までは55年とならなければならないから、これは『失訳・般泥洹経』の50年あるいは49年と齟齬を来す。

このように出家を19歳とする伝承は明らかな矛盾を含んでいる。もちろん多くの原始聖典の伝承とも合致しない。このような矛盾を犯してまでして、なぜ中国では19歳出家説が定着したのか謎である。29歳出家では不都合な点でもあつたのかと思われるほどである。想像をたくましくするなら、男子の本懐を遂げるために事を起すには29歳は遅すぎるという儒教的背景があつたのであろうか⁽²⁾。

(1) 『ブッダ最後の旅』(岩波文庫 1980.6) pp.319~320

(2) 中村元博士は『失訳・般泥洹経』の特徴を、「漢訳者が儒教的世界観を以て相当に潤色していると考えられる」とされている。p.320

[5-3] 中国撰述の文献としては、『仏祖統紀』の出家25歳、苦行6年(足掛け)、成道30歳、成道から入滅までの年数50年、入滅年齢80歳が計算上はもっとも合理的である。しかしこれは苦行6年、入滅80歳という動かしがたい数字を土台として、中国的な伝承の成道30歳、成道から入滅まで50年という数字を合理的に解釈するとすれば、出家は25歳でなければならないという計算上の要請によって導き出されたもので、出家25歳という古伝承がないかぎり成立しない。もちろん原始聖典はもちろん、いかなる仏伝経典、インド撰述文献にも出家25歳説はないから、それこそ机上の空論と称さなければならない。

[6] 以上、釈尊の出家・成道・入滅の年齢に関するさまざまな伝承を検討してみたが、本研究の取るべき態度を変更する必要がないことはいうまでもない。すなわち、パーリと主要な漢訳4阿含(長阿含・中阿含・雜阿含・増一阿含)が共通する、出家を29歳、成道を35歳、入滅を80歳とする伝承は、我々の資料論でいう「第1次水準資料」ということができるからこれを採用する。

その他の諸伝承は矛盾を孕むものが多く、たといそうはいえなくとも特殊な伝承であるに違いはない。したがって本研究ではそれらを採用しない。